

## 国分寺市図書館運営協議会 第2期 第3回定例会要点記録

日時：平成21年5月21日（木）午後2時～4時

場所：本多公民館 講座室

欠席：前田委員

傍聴：なし

事務局：資料の確認。要点記録については何かあったら今月中に事務局まで。

会長：協議会に移る前に、人事異動があったので、挨拶を。

館長：この4月に光図書館長から本多図書館長になった。図書館にずっといたが、慣れていることと不慣れなことがある。教えていただきながらやっていきたい。順番に各地域図書館長と本多図書館係長の挨拶。

会長：新しい体制で始まった。今日の協議に入る。

館長：図書館運営協議会委員の中で市民公募委員の前田さんが市外に転居されるので辞任したいということで受理した。後任については教育長等と公募の形で調整中である。

会長：初めに子ども読書活動推進計画について。進行管理表が配布されている。内容について前回指摘があった。ポイントとなることを事務局から説明を。

担当者：前回たくさんご意見をいただき、担当で考えた。前回配布したものと変わった部分を説明する。目標をはっきり管理表に載せたらという意見をもとに大きな目標を一番に入れた。取り組みの方向は柱に基づいているものなので、どの部分の取り組みなのかははっきり分かるように、初めに柱を入れた。具体的な取り組みの部分にはページ数を入れてある。「図書館資料の充実」のところはページを入れていないが、ここは全体にかかり、計画の3ページのところ言葉として入っているので3ページと入れていただきたい。このように右下のページは、計画の中のページを入れた。目標値は数値化できないものを無理やり入れることはせず、課題のところ細かく書いていこうと文で入れた。数値化できるものばかりあげていくとそれ以上に大切なものが抜けていくのではないかとということで「フロアワーク」という図書館にとって大事なものを6ページの中に入れた。これは数字に出せないのもので、右に課題事項として入れた。評価した時どういう言葉で表すかについては、「○（達成）、△（一部達成）、×（着手できなかった）、継続」とした。「5段階がよい」、「言葉がよい」という意見ももらったがわかりやすく表現しやすいのは「○△×継続」と考えた。2ページ目の、「読書活動の充実」の中で、「小中学校読書指導の充実」「図書委員会の指導」のところは課題事項は学校の担当との話が詰められていないので空欄になっている。「資料の充実」のところは、統計の数字がまだ出ていないので、途中の数字である。以上が前回と変わった部分と、未確定のところの説明である。

会長：今の説明を含め、意見や気になることを出していただきたい。

委員：市立図書館でのおはなし会の実施が前回だと24年度までの数字が出されていたが今回は検討中になっている。ブックリストも5000という数字が入っていたが検討中になってい

る。できるだけ数値化しようという話だったが、変わっている理由は。

担当：具体的数字はできるだけ入れていくべきだが、職員がやるものと協働でやるものがあり、実施回数はその年の事情で変わり、回数×12月というのは難しい。実施しないということではなく、前入れた数字は最高にやってこの回数なので実際そこまでやれるか現実的にどうかをもう一度見直して考えないと一人歩きしてしまうので外した。リストの配布も、関連する施設がどのくらいの数を必要とするかをつかめていないので外した。

館長：補足すると、今の2点は数字を入れたほうがいいのだが、入れるならなるべくきっちりした方がいい。統計も含め本来は本年度の初めに出ていなければいけないところ。関係機関の調査を含め、なるべく数字を入れていきたい。

委員：今後の評価をしていくについて、数値が一番わかりやすいので、前回挙がっていた数値をとってしまったのはなぜか素朴な疑問を持った。

館長：できれば表に基づいてチェックしていくためのものを出したかったが、相手方との関係でどのくらい必要かということに基づいて数値を入れなければならない。また内部の問題としては、おはなし会は、図書館の中で小さい子のおはなし会は毎月定例的にやっているが、小学校中高学年のものではなく、最高位のところに合わせ内部調整がついてなかったので出ていない。数字は追って入れるようにしたい。これをベースとして評価を始めていきたい。表としてはこういうものでよろしいか。来年度になったら22年度を広げる形とし、5年を見据えてこんな表の形でよろしいのかという検討と、20年度の点検をして中身はどうだったかということの評価していただきたい。

会長：一つの枠組みとしてこれでいいか。

委員：「フロアワーク」はわかりやすい日本語にならないか。また目標値が、矢印が24年度まで入っているが内容が入っていないので実績がないのか。初めてのことなのか。

担当：「フロアワーク」は図書館用語だが、本の貸出しだけでなく調べ物などをしに来た人がカウンターに行かなくても、フロアに職員がいることで聞きやすい、職員がフリーに利用者と同じ位置にいて、質問に答えていくということがとても大事なことで、フロアワークという。数字として月何回とかで表せることではない。

委員：その仕事は専門にやるわけではなく、本の整理をしたり片づけたりしながらたまたまやる従的な仕事なのか。積極的な意味での仕事なのか。

担当：現実的には本を返したりしている時に聞かれることが多いが、ついでにやる仕事ではなく積極的にやる仕事である。フロアに出て利用者に何を探しているのかと聞くことで、その資料を提供できる。

担当：特に児童に対しては、フロアにいると子どもから声をかけやすい。「面白い本ない？」と聞かれる。コミュニケーションをとりながら、その子に合った本をこちらから紹介できる。

委員：そうするとその仕事は前からやっていたわけで、必要性があつて大事な仕事の一部なのだという認識で真ん中に入れたということか。

担当：当たり前でとても大事なことである。具体的な行事のような取り組みとは違うので計画の中に入れていなかったが、前回意見をいただいていたはずしてはいけないと思い、「本との出会い

をガイドする」の中に入れた。

館長：前回、日常的なところで利用者と応対することも大事ではないかという指摘があり、実績があつて数字で評価するというにはふさわしくないものであるから、この点検表に入れること自体どうかとも思った。また指摘のように「フロアワーク」という言葉自体が一般的なものにならないかということもあると思う。図書館の日常からするとありがたい指摘だったので入れたが、この入れ方でどうか。

委員：この位置でよい。子どもと図書館の距離を短くする意味でこれに勝るものはない。市役所の戸籍や住民のところに1人2人立っている人がいるのは市民にとって嬉しいことで、席に座っている人に聞くのではなく目の前にいる人に苦情も質問も聞くことができる。図書館にとっても施設を充実する以外のソフト面での柱になってしかるべきだ。ぜひ子どもばかりでなく大人にもソフト面のサービスをすべき。お客さんの中に入っていき、生身の人間が外に出ていくことは図書館運営のソフト面の第1の柱にしてもらいたい。

副会長：フロアワークというのを入れていただいてよかったと思う。20年くらい前に本多図書館で夏休みにフロアに出られるようになったことが印象的で良かったと思った。本との出会いをガイドするということは数値はないが将来的には職員の仕事として書架の間に案内係として出る、夏休み期間は2時間とか、数値が難しいかもしれないが具体的に職員の役割とし、このままだと、やっているのかいないのかわからないということで終わってしまう。1日1時間とか土日とか、相談係とかゼッケンや腕章をつけていればあの人に聞けばいいとなる。将来的には何らかの数値が出れば仕事として認知される。

委員：市役所の案内のことが出たが、能動的にやるのか、受け身でやるのか、たまたまいたら聞かれたということだとせつかくの理想が後ろ向きになる。

委員：自分の窓口経験を踏まえると、本を整理しながらではだめで外へ出て利用者との距離を短くする。銀行と同じ。ただ監視に取られないように、にこにこしてなんでもいらっしやいという姿勢で、高齢者と子どもには特別丁寧に、空いた時間にはなく混んでいるときに、本の整理をする人とは全く別の人が、これこそソフト面の図書館の中心としての位置づけにしてもらいたい。

会長：「フロアワーク」は当たり前だという言い方があったが、子どもの場合は当然やらなければいけない重要なサービス。大人の場合、市役所と図書館とは違う。どう働きかけるかどう話しかけてもらうか、その条件整備が必要。

事務局：「フロアワーク」は図書館の仕事の理念として図書館学でも教えられている。カウンターを通して聞くのとすれ違ったときに聞くのでは気持ちの持ち方が違う。職員はそういうスタンスでいるようにと教えられている。腕章をつけたフロアマネジャーという立場より、ふつと聞けるような雰囲気職員が常々持って逆にならざるを得ない状況だと聞かれやすい。聞かれたことにパッと応じられるという気持ちが図書館職員の必然として求められている。

会長：実績は入りづらいと思う。副会長は数値化して何時間と言われたが難しい。ここに入れるということでよいか。ほかの部分ではどうか。

委員：初めの「資料の充実」のところと、3ページの「YAコーナーの充実」のところと21、

22, 23, 24年度で目標値と下にそれぞれ「除籍も課題」「除籍も必要」とあるが、こういう書き方にした説明を。

担当：内容は一緒なので、「課題」として良ければ「課題」にしたい。

委員：評価の最後の枠の下「○△×」、数字の入っていない部分の三段階評価を全部に適応しているのか、数字を入れられないところすべてこの評価の仕方にするのか。

担当：数字を入れたほうがわかりやすいというところは入れるが100のところは90だったら達成にはならないので一部達成で△、やりますと行ってできなかったところは×、数値化できているものもできていないものもこの評価で、あとは継続してやっていくところは継続と先に入れさせていただいている。

館長：前回出た意見についてトータルとしてまとめていなかったので○△×くらいでどうだろうという話。5段階評価でということならそうする。数値を入れられたら入れた上で評価を○△×ということになっていくと思う。

会長：評価の仕方については、わかりやすさが大事、まだそこまでいっていない、とか取り組み中とか12345はどの程度なのかわかりにくい。

館長：20年度は3段階だが、21年度は前の年を踏まえ5段階になるように、昨年度の実績の評価としては、評価ポイントは○△×なのかということだと思う。

委員：前回を受けて決めたと思うので原案通りでいい。一部達成のあたりが文章化しており判断できるので、継続は単年度でやって来年度もということで継続、達成できたら達成でいい。

委員：○△×のほうがわかりやすい。補うなら全体評価の視点でここが問題点ということを文章表現で完結させるのがいい。

会長：継続は、単年度なら達成しながら取り組み中ということ。

担当：中身を変えていくにしても、充実しながら継続ということで継続としてみた。

委員：5ページの講習会について、読み聞かせの講習会を20年度にやったがここは継続にはならないのか。

担当：講習会はずっと同じ内容でいくかわからない。3回連続講座というのを目標として入れたので、回数を入れて継続という言葉を使わなかった。評価の言葉として継続というのはない。

委員：3回やってその後も3回という努力をするのなら継続という言葉でもいいと思った。

会長：継続という言葉は評価の言葉としてはない。事柄が持続していることで評価ではない。

会長：3回だったらちゃんと達成できたとか2回だったら一部達成ということでいい。

館長：継続的ということとはベースにあるにしても単年度で評価していくということ。

会長：それでは○△×の、3つの評価ということでやっていく。

担当：確かに評価の継続というものはない。もともと継続的にやっていますということで矢印で継続にしたが一つ一つ評価していくことにする。

会長：あとは文章で説明して未着手であればどんな課題が残っているとすればよい。

副会長：4ページの「学校図書館との連携」について、学校図書館と市立図書館との連絡会議はこの内容でいいかと思う。話し合いをもつようになったのは画期的でありがたい。学校の図書指導担当は一人職場で初めてその職場につく方が比較的多い。学校に来て誰も教えてくれ

る人がいない。週5日勤務になったのはうれしいことだが図書指導担当が自分一人で試行錯誤しながらやっていくのは大変、お互いに連絡会議を持つのも大変だと聞く。この会議に図書指導担当は何パーセント出席したのか。教員が多いとも聞いている。図書指導担当の人に連絡会議に積極的に出て交流してもらいたい。課題のところに、図書館が図書指導担当を指導するというを入れてほしい。選書・除籍なども大変なので、熟知している図書館の人が教えるしかない。担当の人が困っているだけだと勿体ないと思う。

館長：評価は書かないで、わかる範囲で課題を書いていくという構造である。書いた上で評価はこうだとさせていただく。現場の会議がどうであったということしか書いていないが、そこを通じて学校図書館がどうしていったらよいのか、それに対して図書館がどう対応していったらよいのか、その上でそれが継続課題であって2年3年後どうかとなっていったらよい。

会長：よろしいか。

委員：今年度司書が図書室に入って喜んでいる。これから充実させていかなければならない。未経験で初めてでぽつんと配置されて大変なようだ。5年いて辞めた人に聞くしかないが何度も教えてもらうわけにはいかず、他の学校の司書にもその学校の勤務があるので聞くわけにもいかない。時間外に先輩に教えてもらっている。そういう個人的な努力では済まされない。学校の全部の図書のことを担っていくので公共図書館がアドバイザーになってサポートしていただきたい。選書をどうしましょうと先生に言ったら自分で適当に考えてくださいと言われてたという。司書教諭の方が一緒に考えてくれなければいけないのではないのか。他の市で経験してきた人もいるが、やる気があって初めての人に公共図書館の人が指導してほしい。

委員：今の話はここに盛り込む内容の話か。学校の司書の話であって図書館の話ではないのでは。

副会長：教員の場合は資格を持って入った時に、30人もの人が指導するわけだが学校図書館は1人なので資格を持っていても未経験なので大変である。

委員：ここにそれを網羅するという必要性が分からない。

委員：図書館が図書指導担当をサポートするという言葉を一言どこかに入れてほしい。

委員：それは図書館の仕事なのか。

会長：支援というのはいろいろな形である。支えあいは大事。同じ図書館の専門職員としてやりうらと思う。ただし学校がきちんと責任をもってやらなければならないことで、公共図書館の立場としては、指導部がやらなければいけないことならやる必要はないと思う。行政側の区分けが常に必要だと思う。

館長：会長の言われたことも、PTAの方が言われたことも正論だと思う。学校の中の図書館、読書活動を充実させなければいけないというのは誰にも大切な課題である。一方で小中学校の図書館の資料費は市立図書館の図書費よりも付いていたりもする。そこを1人担当の司書がどうやって充実していったらいいのか課題、方向性を与えたりするのは学校指導課だが、基盤整備は得意だが中身はわからないのも事実。公共図書館の個々のスタッフも、学校図書館が施設としてどういう立ち居振る舞いをしていったらいいかはわからない。どんなふう蔵書を作っていたらいいかは子どもたちの顔を見ていなければできない。充実のための方策、支えあいは必要。図書館が事務局になって課題を提案していくという点では大事な課題であ

る。連絡会議はできているが次にどうしていったらいいのかというところ。

委員：図書館に相談しなければ本も決められないのではなくて、司書の資格を持っているのだから、自信を持ってやればいいわけで困っていれば自分で勉強したり指導を仰げばいい。図書館が指導したり支援したりすることが必要なわけではない。

館長：学校に図書費を配当したり司書を雇ったりするのは学校指導課だか、こういう図書館を作っていくなさいという指針は与えられていないようだ。

委員：新米の人はどこも同じ。自分が勉強させてもらうつもりなら、図書館が門戸を開いていればいくらかでも受け入れてもらえる。

会長：図書館はチームワークでやっていく。学校図書室はノウハウそのものを蓄積していないので公共図書館の持っているノウハウを学ぶとか援助してもらうという協力関係の中で子どもの読書環境整備というものができていく。それぞれ個々に頑張れというのでは連携はできない。何が課題になるかということで議論しなければいけない。ここに書かれるべきことなのかということはあるが、課題はいろいろあり、それを書き込んだらどうかということだと思う。いずれにしても学校図書館を良くしなければならぬというところで、それには公共図書館がどう貢献できるのかということは考えなければいけない。

委員：図書館側から見た場合、連携を強化する相手として図書指導担当をレベルアップすることも連携強化になるわけである。

委員：そもそも組織が違うのだから入り込んでいけない部分もある。とりあえず会って話をする、話し合う場を作って協力するところを教えてほしい。その辺から出発して図書館のリーダーシップを発揮していく。話をしあっていけば他の課題も出てくるのではないか。

委員：組織としては教育委員会、校長会は教育長の下部組織という関係か。

館長：学校の教育内容については教育委員会のやっていることは施設整備である。

委員：校長会は市役所の組織の中にあるわけではないのか。

委員：校長会のなかで司書・司書教諭の在り方について、指導目標を与えるとか、校長が指針も出さず、司書や教諭が要望も出さず勝手にやればいいというのはおかしい。こちら側から支えるというのは疑問である、窓口を開けているのは大事だが、ノルマとして指導するというのではないのではないか。今後図書館の市全体の活動の中で読み聞かせや子供の読書指導などで問題があるとしたら図書館に要望を出すとか、こういう状況を校長はどう考えるかということなどを打診するとか各学校の司書教諭が少しずつ前進していくということにならないといつまでも同じなのではないか。

副会長：話し合いや経験を積みながらやっていくのだと思うが図書館は30年以上の蓄積があるが司書が毎日来るようになったのは今年始まったばかり。図書館が連携協力していくという姿勢があればよいと思う。

委員：各学校の連携というのが忙しくてできないというが、自分たちの仕事ではないのか。何らかのアクションをすべきではないか。

副会長：勤務時間が決まっており、しかも正職員ではない。

事務局：学校の司書は学校指導課というところが所管。歴史が浅い分野で週5日9時から3時の

配属は今年から。週2回の配置で、業務的に横の連絡が取りにくかった。ここにきてようやく年2回図書館との話し合いの場が設定できるようになった。学校指導課が設置するが、図書指導担当は3時までの勤務なのに3時以降に設定される。今後の課題として双方の連絡会議が数多く行われるようになるといい。図書館側が設置できればよい。しかし図書指導担当が出るとは限らない。教員である司書教諭が出る場合もある。学校図書室の資料費が膨らんできたのはここ2、3年で少し前までは学校図書室は非常に悲惨な状況であった。選書のしかたは公共図書館と学校図書館とでは違う。学校は教材を含めた選書のしかたをする。学校によっても教員がこういうものをとるところと、専門の司書に任せるところとがある。双方の情報が交換されるということは議論する土壌となると思うのでそういう形になればと思う。図書館として児童担当を主に出しているが、そういう気持ちで臨んでいる。

委員：オフィシャルな形では徐々に整っていき、育てることができると思う。緊急課題が起きたとき司書が右往左往するのではなく、校長等が指示すればいいことであり何ら問題はない。本人が他の地域の学校を訪問すればよい。どんな本が入っているか見当がつく。問題を解決するために経験を積んでいくのは本人の問題である。オフィシャルに設定しなければいけないとか委員会で検討しなければいけないとかいうのとは違うのではないか。

会長：子ども読書環境というのは公共図書館もあれば学校もあれば家庭もある。どこでもそうだが一人では育たない。集団での学習会研修会などいろいろな形がある。公共、大学、学校、個々であり集団であり援助しあうものと形はいろいろある。国分寺の子どもたちの読書環境を育てる専任職員の力量形成、専門形成をどういう形でやればよいかは、公共と学校の図書館が協力し合うなどいろいろな課題がある。物流など様々課題があるが、ようやく連絡会議という形でやれるようになった。何をやって何をやらないかを含め議論していくことになる。学校図書館はこんなことを困っているが選書など図書館として援助できないかということが今意見として出ている。次回に先送りになるが、何が明らかになったか、何を課題としていくのか出してほしい。

館長：数字は今日出されたことも含め付け加えたい。皆さんもチェックして出していただきたい。

会長：では次の課題に移る。協議会の今年度の予定については決まっていない。皆さんからも要望を出していただいて決めたい。昨年度の見学会のようなものを入れていきたい。前回のようには諮問がないので、日常的な図書館のサービスの在り方、読書計画の進行管理のようなものについて常時やっていく。それ以外に皆さんの方で意見があれば出していただきたい。学習会、運営協議会の研修会などもある。

委員：前期の答申の中の中央図書館の問題は、どうなっているのか。市の計画の中で図書館はどう変わっていったらいいのか。議論する意味があるのか。あと1年半あるわけで中央図書館として先々どの程度のものやっていると、従来の5館と違う機能をどうしていけるのか。大きな図書館ができそうもないと聞いているが。

会長：その件については後で情報提供の時に。答申では大きな図書館を提示したが、それを建設できるのかどうかも含めたチェックをぜひしていきたい。

副会長：学習会について、今日話していても皆さんによって温度差がある。それは大事なことで、

国分寺の図書館がどういう方向性を持ってやっていったらいいのか学習会をやるといいと思う。答申を前期に出し、その後教育委員会としての指針を作ってくれたが教育委員会の関係者との話し合いができる機会があれば協議が進められるのではないか。教育長とか学校指導課との話し合いとか。

委員：今の時点では中央図書館というのは過去のもの。あまりに現実離れしている。中央図書館は庁内では相手にされない。それを議論しても意味がない。次元を下げた現実の図書館活動に密着した現実から離れない議論をした方が意味がある。

委員：学校図書館を見たい。ベテランがいるところと新人がいるところと。

会長：他は要望を聞きながら計画を立てていきたい。いくつか大事なことが出た。あと4回分これらを織り込みながら事務局と相談し、計画したい。次に事務局から報告。

館長：予算について説明。4月から開館時間が9時30分になった。ICタグ関連の説明。

会長：予算については何とか頑張ったという感じ。9時30分については全館か。

館長：全館、課題は夜だったはずといわれた。

委員：予算全体はいつ締め切りだったのか。協議会答申と予算は、全然リンクしていないのか。

館長：リンクしていない。答申を使うとなると秋くらいから。

委員：日経テレコンは動いているのか。

委員：ICタグは指針にあってスタートした。コンピュータ借り上げ料はネットに繋がるものか。

館長：事務用と利用者用両方のインターネット検索性である。

委員：現行日本法規は紙か。雑誌と一緒にでは。

事務局：差し替え用である。今後ネットでという考え方は持っている。

委員：日経テレコンはこの価格でできるのか。

事務局：アクセス1件についてである。

委員：図書費新聞雑誌費合わせて去年に比べてどうなのか。

館長：同額である。

委員：講師料のところ、本多の78,000円は。

館長：3回分である。秋の読み聞かせ講習会などを想定している。

会長：よろしいか。

館長：あとひとつ、北口開発のこと。新しいことが進んだらここで必ず報告するが、2月から何も進んでいない。計画そのものは変更ない。9階建てのビルの方に図書館が入る。踏み込んだ話はまだ下りてきていない。

会長：次回は7月9日（木）午前10時から、もとまち図書館で行う。